

本願寺教学伝道研究所  
ニューズレター『あなかしこ』

あなかしこ  
A N A K A S H I C O

02

拝読のススメ

特集

「浄土真宗の救いのよろこび」

エッセイ

現代社会の「自死」を考える

書評

『寺よ、変われ』を読む

論考

仏教と看護

題字／親鸞聖人真蹟「大御前宛書状」(本願寺所蔵)より  
写真提供／松村朗

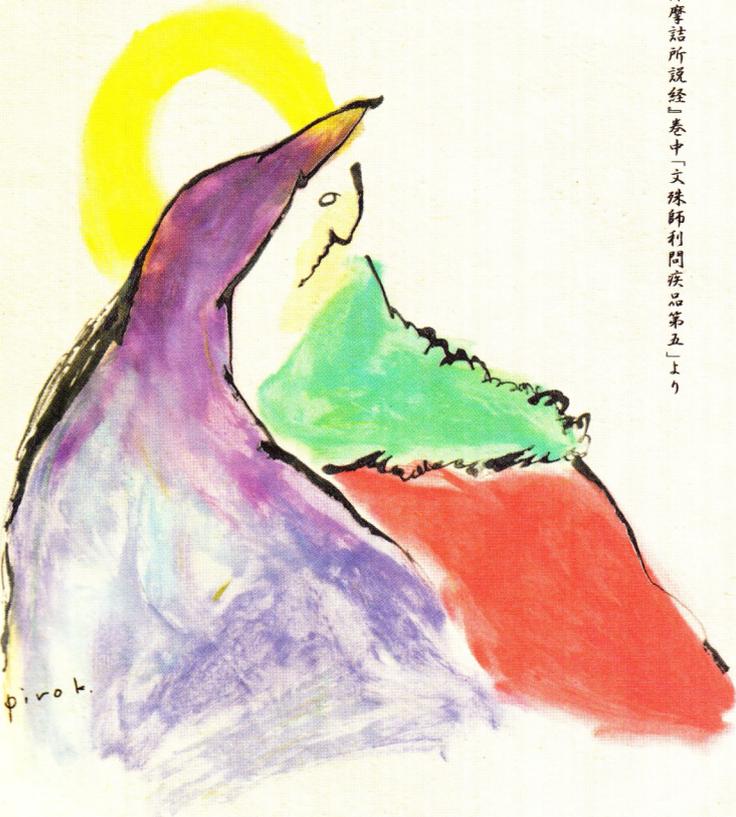
衆生しゅじょう病やめば、

すなわ 則すなわち菩薩ぼさつも病やみ、

衆生しゅじょうの病やまい愈いゆれば、

ぼさつ 菩薩ぼさつもまた愈いゆ。

『維摩詰所説経』卷中「文殊師利問疾品第五」より



菩薩とは

どのようなお方  
なのでしょうか？

多くの経典から「さとり」の完成を求める者として知られていますが、『維摩経』には、人々の苦悩を「我がこと」と受け止める、菩薩の心のあり方が描かれています。

人々を思つてやまない菩薩の心を通して、私たちは、他人の気持ちに寄り添うことや、共に歩むことの大切さを教えられます。

### 『維摩経』

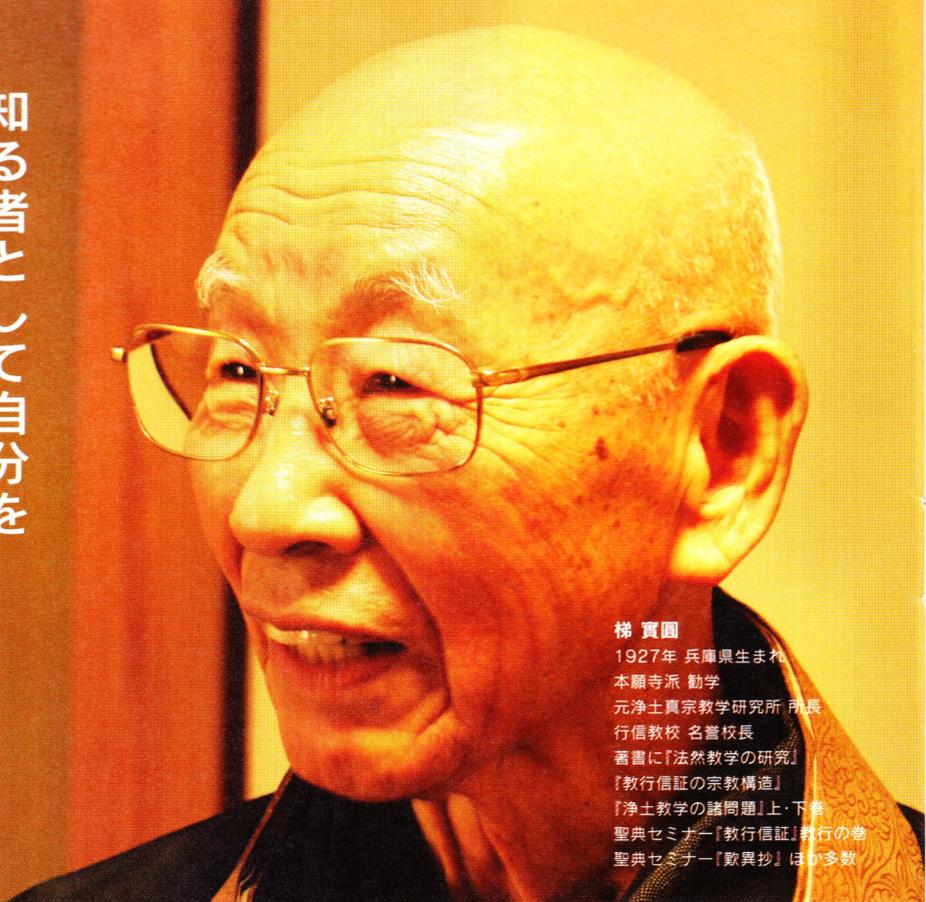
主人公は維摩居士という在家者です。在家者のさとりを説く大乘仏教の特徴が顕著な経典ともいえるでしょう。

釈尊は、病床にある維摩居士を見舞うよう多くの菩薩たちに告げます。しかし、誰一人として手を挙げる者はいません。

維摩居士は、どの菩薩よりも説法に巧みで、時に菩薩をやりこめてしまうからです。

そんな中、意を決した文殊菩薩が見舞いに行き、維摩居士の病について尋ねたときに、返ってきたのがこの言葉です。

七祖のお一人曇鸞大師は、『往生論註』に『維摩経』を多く引用されました。また、親鸞聖人は、そのご文を『教行信証』（註釈版聖典「三一九頁」）、『入出二門偈』（註釈版聖典「五四九頁」）に引用されています。



梯 實圓  
1927年 兵庫県生まれ  
本願寺派 勤学  
元浄土真宗教学研究 所長  
行信教校 名誉校長  
著書に『法然教学の研究』  
『教行信証の宗教構造』  
『浄土教学の諸問題』上・下巻  
聖典セミナー『教行信証』教行の巻  
聖典セミナー『教異抄』ほか多数

# 知る者として自分を 捉えるんじゃないなくて 知られる者としてある

教えを学ぶ 出遇いと姿勢

連載 先學にきく

聞き手／葛野 洋明（教学伝道研究センター 常任研究員）

—真宗との最初の出遇いは？

若いころ、友達と読書会をやりました。その友達が倉田百三さんの『出家とその弟子』を持ってまして、その本の扉に「煩惱障眼雖不見大悲無倦常照我」と書いてありました。

それを見た時に、こちらから見ることができないけれども、向こうから見られている、常に護られている、そういうのを非常に印象深く読んだ。直感的に違う世界があると感じたんですね。知る者として自分を捉えるんじゃないくて、知られる者としてある、そういう風な逆転が非常に印象的だったのを覚えてますね。

年は十八か十九くらいですね。  
仏教に本格的に遇うのは、その後、行信教校へ行つてからですな。

—行信教校ではどのような講義を？

遠藤秀善先生の講義は非常に高度で、当時の私にはほとんど分からなかった。だけどね、分かったらいつかという気持ちを起こさせてくれる講義だった。先生の人徳がそうさせたんでしょうな。

個人的な指導もいただいた、山本仏骨先生の講義は、非常に論理整然として分かり易い。だから、この講義で仏教っていうのが、少しずつ開けていくんです。

遠藤先生と山本先生、お二人のコントラストが良かったんですな。(笑)

—先生から影響を受けたことは？

一年の二学期に山本先生から『選択集』の解釈書『指津録』を読みなさいと言われた。非常に分かり易くてスツと読めました。分かり易いから余計、『選択集』が論理を飛躍して展開しているところに気付かされました。それで、この

『選択集』の飛躍してるところをちゃんとしたくて、法然教学をまとめようと思ったんです。これでその後、教員になって『選択集』を最後までずっと講義することになったわけです。

五十歳になって『法然教学の研究』を書いてからは、法然聖人と親鸞聖人の違いについて見えています。今のところは、お二人が非常に接近しているというか、スツと繋がっていくことがあると思ってるんですね。

—後学の者へ、励ましの言葉やお薦めの書籍を教えてください。

私には、そういうことをできるようなものは何もないんで…。

今思うのは、もういっぺんあのお経を読みたいなとか、もういっぺんきちつと通読したいなと感じますね。お経は、何回も読んだら、そのたびに新しい視点やら、考え方、味わい方というようなものを開いて下さいますのでね。

まずは、一番肝心の三部経と七祖聖教ももう一度じっくり読まなあかんと思うんです。例えば『大経』は、始終読んでるんですけど、実は読み落としていることがなんぼでもありますわ。読んでるんですよ、言葉では。だけど全然こつちに響いてなかった。そういう意味では何度でも読みたくなりますな。

もう一つは、いろんなお経や論書をもう一度読みたいなと。『撰大乘論』などもう一度読みたい。『華嚴経』の「入法界品」あたりも。しかしね、もういっぺん読むちゆうつたつて、あれを目の前に置いた途端に、ああこんだけあるんやつて。(笑)

そんなんで、読みたい本ばかり、そんな感じがしてますな。

文責／竹本了悟（教学伝道研究センター 研究員）

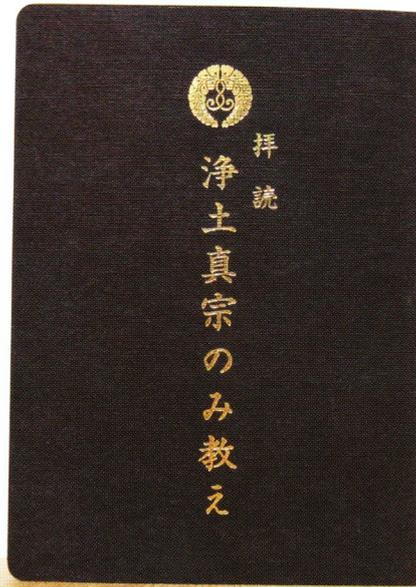
・遠藤秀善(1878-1958)…行信教校 校長、行信仏教学院 院長を歴任。  
・山本仏骨(1910-1991)…本願寺派 勤学。行信教校 講師、龍谷大学文学部 教授、伝道院 院長を歴任。  
・『指津録』…空華学派・善護師の講録。

この記事は、一時間以上に渡って行なわれたインタビューを短くまとめたものです。

# 「浄土真宗の救いのよろこび」

## 拝読のススメ

「浄土真宗の救いのよろこび」の第一段には、浄土真宗の根本である阿弥陀如来の本願が「南無阿弥陀仏」のよび声となっており、私たちにはたつきかけてくださっていることが示されています。



阿弥陀如来の本願は

かならず救うまかせよと  
南無阿弥陀仏のみ名となり  
たえず私によびかけます

### 阿弥陀如来の本願

阿弥陀如来は「すべての生きとし生けるものを、かならず救う」という本願をたてられた仏さまです。

私たち衆生を願いの対象とした阿弥陀如来の本願は、ひとり子を想う親の心にとえられます。

親は子どもを想い、慈しみの心に向けています。私たちは、自らの身をふりかえり、私たちを育ててくれた親の心に気づいたとき、大きなよろこびと、感謝の思いを抱くのではないのでしょうか。

子どもが親の心に気づくよりも前に、親の心は子どもに向けられているように、阿弥陀如来は、私が願うよりも前に、私たちに願いの対象とし、慈悲の心をふり向けてくださっているのです。

### 「南無阿弥陀仏」のよび声のなかに

私たちの人生は、決して平らな一本道ではありません。よろこびもあれば、避けがたいさまざまな悲しみ、苦しみがああります。時には希望さえも見失ってしまうこともあるでしょう。

しかし、どのような時であっても、阿弥陀如来の本願のはたらきは、「南無阿弥陀仏」の名号となって、常に私を目当てとしてはたらき続けてくださっているのです。いつ、どこで、どのような状況にあったとしても、

阿弥陀如来の本願は、見捨てずにはおかないと、私をよびつづけているのです。

親鸞聖人は、「南無阿弥陀仏」を阿弥陀如来の本願のよび声であると解釈されました。

今、ここに至り届いている「南無阿弥陀仏」の六字の名号は、はるかなる過去から迷い続ける私たちを救いとる、阿弥陀如来のよび声なのです。「南無阿弥陀仏」というよび声を聞きひらいたとき、すでに阿弥陀如来の本願による救いのはたらきのなかにあったことを知らされます。

南無阿弥陀仏の六字のなかに、つねに私によびかけ、救わずにおかないとはたらき続けてくださっていた、阿弥陀如来のご本願を知り、よろこびのなかで、お念仏の毎日を歩むことができます。

中平了悟(教学伝道研究センター研究員)

### 《本願と名号》

如来の本願を説きて経の宗教とす、すなはち仏の名号をもつて経の体とするなり。  
〔註釈版聖典〕一三五頁

親鸞聖人は、「仏説無量寿経」の肝要は、阿弥陀如来の本願にあり、その教えの本質は、「南無阿弥陀仏」の名号にあると示されています。

### 《本願のよび声》

本願招喚の勅命なり  
〔註釈版聖典〕一七〇頁

親鸞聖人は、「南無阿弥陀仏」の六字を解釈して、阿弥陀如来のよび声であると示されています。

阿弥陀如来の本願は

かならず救うまかせよと

南無阿弥陀仏のみ名となり

たえず私によびかけます。

このよび声をききひらき

如来の救いにまかすとき…

阿弥陀如来の尊前で、声を合わせて『拝読 浄土真宗のみ教え』を拝読している声が聞こえてきます。

月に一度の「月参り」の「コマです。いつもと同じように「正信念仏偈」をお勤めし、若院さんが『御文章』を読まれました。

そのあと、若院さんが、ふろしきの中から黒い表紙の『拝読 浄土真宗のみ教え』を取り出して、勧められました。

「今日は、これを一緒に拝読しましょう」

若院さんの声につづいて、おじいさん、おばあさんと、小さな女の子もいつしよに声を合わせて拝読しました。

「お寺でお聴聞した阿弥陀さまのお話を思い出しました」

おばあさんがふっと感想をいわれました。その横にいた女の子は、

「お寺で聞いたお話って、どんなだったの？面白かった？」

と興味津々です。

おじいさんは、

「わかりやすい言葉で書かれていますね。浄土真宗の教えって、こういうことだったんですね」

拝読した後も、本をめくって、いろいろ



ろなページに目を通しています。

若院さんは、その一人ひとりの言葉をにこやかに受けとめて、お話をされました。

「阿弥陀如来は、いつでもどこでも、私たち一人ひとりのことを想い、救わずにはおかないと、願いをかけてくださっている仏さまです」

「おじようちゃんも、おばあちゃんといっしょにぜひお寺にお参りに来て、仏さまのお話をお聴聞してみてくださいね」

普段のお勤めのあとは、他愛のない世間話になりがちでしたが、今日は仏さまの話でもちきりです。

「一緒に拝読してもらうと、仏さまのお話をするきっかけになることが多くて、みなさん本当は、仏さまの教えを聞きたいと思っておられたんだなあと、実感しています。」

若院さんは聖典と、『拝読 浄土真宗のみ教え』をふろしきの中にしまい、足取りも軽く、次のお参り先のお宅に向つていかれました。

## 『拝読 浄土真宗のみ教え』の用い方

『拝読 浄土真宗のみ教え』は、ご本尊の前で、自ら声に出して拝読するものとして作られています。

本書四六頁の「拝読について」には、日常の勤行や、ご法座で拝読する際の一例が紹介されています。またこの他に、次のような使い方も考えられます。

◎ご法話の中で、お参りの方々と一緒に声を合わせて拝読する。

◎味わい深い一文を抜粋して揭示伝道に用いる。

◎法座や勉強会のテキストとして読み深める。

アイデア次第で様々な用い方ができることでしょつ。

なんとなく読み通していた部分も、繰り返し声に出して拝読する中で、徐々に味わい深いものになっていきます。一語一語の背景にあるみ教えの意味が知られ、読み返すたびに、さまざまな想いが胸の中からわき上がってくることでしょつ。折に触れて頁を開き、尊前で拝読し、み教えの理解と味わいを深める一助にしていただきたいと思えます。

# 仏教×散歩

日本に仏教が伝えられて1500年。

その教えは、人々の心に受け継がれ、さまざまな文化をのこしてきました。

カメラと地図を片手に歩くと、

ふだん何気なく通り過ぎる路地裏に、意外な日本仏教の風景が見えてきます。

今回は、平安時代、政治と仏教の中心であった東山七条の地に、親鸞聖人の面影を訪ねます。



## 阿弥陀ヶ峰

春は曙。  
やうやう白くなりゆく、  
山際すこしあかりて、  
紫だちたる  
雲の細くたなびきたる。

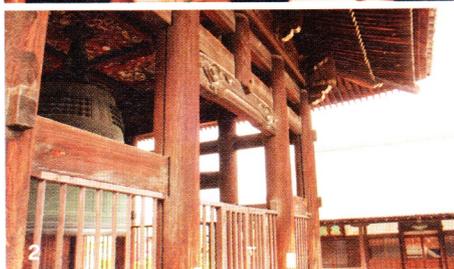
春の夜明け、峰々の稜線がしだいに明るくなっていく風景を賞賛する『枕草子』のあまりに有名な一段。実は後段で「峯は、あみだの峯」と述べていることをご存知だろうか。

清少納言が高く評価する「あみだの峯（阿弥陀ヶ峰）」は、東山三十六峰のひとつ。本願寺の位置する六条堀川から眺めて東に拡がっている。本願寺からは七条通りをまっすぐ東へ。峰々を眺めながらゆくり歩いて三〇分ほど。山麓には、三十三間堂、智積院、方広寺など中世以来の寺院が密集する。

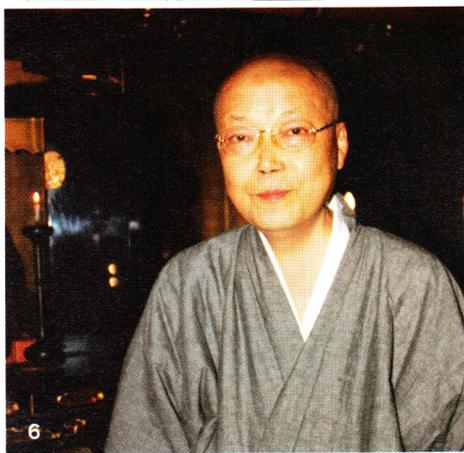
## 後白河法皇の御所

修学旅行生や観光客でぎわう東山七条周辺。かつては平安後期に三五年間もの長きにわたって院政をしいた後白河法皇（一一七〇―一二二〇）の御所「法住寺殿」があった。法皇が創建した蓮華王院（三十三間堂）のほか、多くの塔堂伽藍が建ち並び一大宗教都市であった。

現在、跡地の一角にはホテル「ハイ



1 三十三間堂前の「七條甘春堂」では、季節の和菓子  
が楽しめる。2 「国家安楽  
の鐘」で有名な豊臣秀吉  
建立の方広寺もすぐ近く。  
3 三十三間堂裏の法住寺。  
毎年5月には後白河法皇  
忌が営まれる。4 親鸞聖人  
そば喰いの木像。5 法住寺  
前の石碑。6 法住寺ご住職  
の赤松隆成師。近年は「今  
様」の復元にも取り組ん  
でいる。7 七条通りより阿  
弥陀ヶ峯を眺める。



## 散歩メモ

### — そば喰いの木像って何？

親鸞聖人が毎夜、六角堂に参籠するために比叡山を抜け出していた時、そばの振る舞いがあったが、この木像が身代わりにそばを食べていた、という伝説。この伝説は比叡山無量寿院(現・法住寺)、比叡山大乗院など各地に伝わるが、文献上で確認できるものとしては、近世末の『比叡山無量寿院記録』(法住寺所蔵)が最も古い。比叡山時代の親鸞聖人がどの院家で修行されていたか、どのように六角堂に参籠されたかを物語る貴重な伝承である。

アットリレンジエンシー 京都」が建つ。ホテル内のレストランからは、当時の面影を遺す庭園を眺めることができる。

### 浄土への願い

あか月静かに寝覚めして、  
思へば涙ぞ抑へ敢へぬ、  
儂く此の世を過しては、  
何時かは浄土へ参るべき

(『梁塵秘抄』巻二)

歌謡(今様)の名手としても知られていた後白河法皇。晩年には『梁塵秘抄』を編纂し、浄土往生への思いを歌

った多くの法文歌を収録した。法皇は、建久三(一一九二)年、お念仏を称えながら六六歳の生涯を終える。比叡山にて学道に進進しておられた親鸞聖人、二十歳の頃のことである。

### 親鸞聖人と法住寺

「最近はまだ知られていないのですが、この地は浄土真宗とも縁が深いんですよ」と法住寺(現在は天台宗)ご住職の赤松隆成師(62)。法住寺には「親鸞聖人そば喰いの木像」が安置されているからだ。この像は、比叡山西塔の無量寿院にあったものが、天保五(一八三四)年に東山渋谷の仏光寺に移され、その後、法住寺に安置されることになった。「そば喰いの木像」といえば、親鸞聖人が修行された比叡山東塔の大乗院が有名だが、親鸞聖人の比叡山時代をもの語るもう一つの伝承がここにある。

多くの伝承をもつ親鸞聖人の事跡。それは多くの人々のお念仏の教えに触れたいという願いのなかで培われてきたものである。「史跡を歩くことで、親鸞さんをより身近に感じてほしい」と語るご住職。さとりを求め苦しみ悩んだ若き親鸞聖人を偲びつつ、歩いてみたい。



高橋 卓志 著  
寺よ、変われ

岩波書店(岩波新書) 819円

- ・プロローグー世界は「苦」に満ちている
- ・第1章 寺は死にかけている
- ・第2章 なぜ仏教の危機なのか
- ・第3章 苦界放浪ーいのちの現場へ
- ・第4章 寺よ、変われ
- ・第5章 葬儀が変われば、寺は変わる
- ・エピローグー寺が変われば社会は変わる

「そうはいつでもなあ〜」。この呟きは、本書を読んだ多くの僧侶が、洗面をつくりながら最初に発する言葉であろう。恥ずかしながら、評者の最初の言葉もそうであった。

著者の提言の一々は、明快であり、論理的であり、具体的である。仏教界の、特に僧侶のあり方を浮き彫りにし、その問題点について、「まことにその通り」と言わずにはおれないほど明確に指摘している。

「第2章 なぜ仏教の危機なのか」では、ニューヨーク・タイムズの記事を紹介し、その内容をまとめて、1.葬式仏教が揺らいでいるという危機、2.家族的経営である寺が消えるという危機、3.葬儀社とのかかわりによる葬儀のカタチの変化による危機、4.檀家システムが崩壊するという危機、5.戒名や布施というお金からむ悪いイメージを与えているという危機、6.それらから抜け出すための「あせり」という危機を挙げ、6つの危機を具体的に解説していく。それらの危機を十分に認識し、その対応策を講じて行われているのが、「第4章 寺よ、変われ」「第5章 葬儀が変われば、寺は変わる」で紹介される著者の所属寺・神宮寺の活動なのである。それは、「寺は何をしてほしいか」という多くの人々の要望に応えたものなのである。

著者は、「寺が変わる」ということはなかなか困難であることを充分承知している。「寺は変わる必要がない」という意識や意見は僧侶側だけでなく、檀家側にも根強いことを述べる。また、僧侶側には「寺は世俗化すべきではない」という原理的な意識に逃げ込む場合もあり、檀家側には「余分なことをやらず、先祖供養だけをやってもらえばいい」という意見も多いと指摘する。

このような状況の中、伝統仏教の危機の改善をはかるには「強力な変革の意志を持つこと、そして社会の人々からの支持が必要」と著者はいう。「寺とは何をするとところか」「僧侶とは何をするとするか」について、著者が導き出した答えは

「社会に起きている、あるいは起きようとしているさまざまな『いのち』にかかわる難問(四苦)にアクセス(接近)する。そしてその難問に対して、支えの本性(利他心)を発動させ四苦に寄り添いながら、課題の解決を図っていく、という役割を担うのが坊さんであり、その拠点として寺がある」

であった。

変わるためには動かなければならない。はたして僧侶は動けるのか。「そうはいつでもなあ〜」に止まるだけなのか。本書にも紹介されている『がんばれ仏教!』を書いた上田紀行氏が、「既成仏教の各教団に講演を依頼された際、大変良い話だと讃嘆してくれるものの、僧侶や教団に変化の兆しは見えない」と何かの折りに話されていたのを思い出す。本書を読んで元気を出し、動き出す僧侶が一人でもいることを著者は願っているに違いない。

評者/森田 眞円(教学伝道研究センター委託研究員・京都女子大学教授)



教学伝道研究センターの研究員が、  
仏教に関する読みやすい書籍を紹介いたします。

この他、教学伝道研究センターでは、ホームページ内に「仏教書レビュー」のコーナーを開設しております。毎月10日ごろ更新し、4冊ずつ紹介して参ります。

仏教書レビュー

検索

<http://crs.hongwanji.or.jp/kyogaku/review/>  
このページはリンクフリーです。



宮崎 幸枝 著

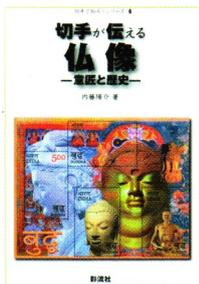
**お浄土があつてよかつたね - 医者は坊主でもあれ -**

樹心社 2,100円

本書は、医師として、念仏者として仏法を喜ぶ著者が、医療法人精光会みやざきホスピタルの機関誌『よこそ』に綴ってきた言葉をまとめ、書籍化したものである。

医療の場で数々の仏縁に触れ、阿弥陀如来の慈悲を喜んできた経験を著者は記す。病院には「人間に生まれた価値、人生の真の意味とは何なのか」という問いが渦巻いており、その解決を「仏の教え」に見出し、「宗教無き医療は不健全である」と言う。この思いは、サブタイトル「医者は坊主でもあれ」にも反映されている。

全編を通して、阿弥陀如来によって常にいだかれ続けていた我が身であったことが知らされていく一冊となっている。



内藤 陽介 著

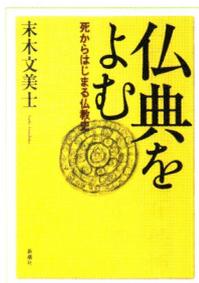
**切手が伝える仏像 - 意匠と歴史 -**

彩流社 2,100円

著者は、切手などの郵便資料から、国家や地域のあり方を読み解く「郵便学」を提唱する異色の若手研究者である。仏像を描いた300点以上の切手をカラー写真で紹介する。図柄の内容に応じて分類され、切手の解説を通して、仏教の概要や歴史を学べるようになっている。

紹介される切手の発行地は、日本やインドをはじめ、タイなどの東南アジア諸国、中国、韓国、モンゴル、さらには、イスラム教国のアフガニスタンやパキスタンにまで及ぶ。特に目を引くのは、1998年、日系移民100周年を記念してキューバで発行された、興福寺薬師如来像の切手である。

切手を通して、発行している国家と仏教との関係を考えてみることも、本書の楽しみ方の一つであろう。



末木 文美士 著

**仏典をよむ 死からはじまる仏教史**

新潮社 1,890円

仏教学者・末木文美士氏が、代表的な仏典を、「従来の固定観念から解き放ち、今日に生きる思想書」として読み込んでいった野心的な試みの成果である。とりわけ、「第一部 死からはじまる仏教」において示される「死者という異形の他者と正面から向き合う」仏教という視点には、氏の独自性が顕著である。また、『無量寿経』や『教行信証』に対する新しい解釈は、刺激的とさえ言えよう。

なお、氏の「死」「死者」に対する考え方については、『念仏の源流』（本願寺出版社）にも詳しい。

新刊紹介

日本と道教文化

著者／坂出祥伸  
角川学芸出版(角川選書) 1575円

日本の靈性 完全版

著者／鈴木大拙 解説／末木文美士  
角川学芸出版(角川ソフィア文庫) 980円

法話エッセイ心を変える36のレシピ  
目からウロコの深い法話

著者／吉村隆真  
探求社 1260円

イスラームの教えと清沢満之の思想  
比較思想の立場から親鸞の思想を考える

著者／狐野利久  
探求社 2100円

歴史を知り、親鸞を知るシリーズ2  
恵信尼さまってどんな方？

著者／今井雅晴  
自照社出版 840円

虫の眼鳥の眼 仏の眼

著者／渡辺悌爾・渡辺充子  
自照社出版 1260円

親鸞再考

著者／佐々木正  
法蔵館 1890円

老いて出会うありがたさ

著者／圓日成道  
法蔵館 1050円

ダライ・ラマ 実践の書

著者／ダライ・ラマ14世 訳／宮坂有洪  
春秋社 2100円

なぜいま「仏教」なのか 現代仏教のゆくえ

著者／奈良康明・山崎龍明  
春秋社 1890円

ブツダ

著者／川西蘭 絵／長尾みのる  
本願寺出版社 1260円

親鸞聖人その教えと生涯に学ぶ

著者／千葉乗隆・徳永道雄  
本願寺出版社 1050円

## ニュースと「宗教」

東京支所は、膨大な情報が収集・発信されている東京に拠点を置き、情報の収集・分析作業などを行っています。その作業の一環として、新聞各紙(東京版)から宗教に関する記事を収集しています。

マスメディアから発信されるニュースの中には、宗教に関するものも多数含まれています。宗教「離れ」といわれますが、多くの人々は毎日、ニュース報道を通じて、宗教に関する情報に「接し」ています。ただし、マスメディアは、世のなかで起ったすべての出来事を報道しているわけではありません。その中から、「報道する価値」があると判断したことを取り上げています。これは宗教に関する出来事でも同様です。

「報道する価値」の有無を判断する基準は明文化されていませんが、それはジャーナリズムの組織・業界に身を置いて活動する中で培われていくと考えられています。マスメディアの研究者たちは、①「社会にとって『悪い』出来事」、②「社会的に重要な団体・人物に関わること」、③「『公共』に関わること」、④「規則・継続性のあること」などを、基準として推測しています。

これを宗教にあてはめて考えると、宗教のこういった面がニュースで取り上げられやすいのかが分かります。個々の例としては、

- ① 宗教者の不祥事
- ② 政治などに関わる宗教団体の動向
- ③ 宗教者の社会活動
- ④ 長年続き、習俗として定着している行事

などを挙げるができるでしょう。逆にいえば、以下のようなことがらは取り上げられにくいということです。

- ①' 一般寺院でまじめに活動している宗教者
- ②' 一般の寺院
- ③' ④' (公共的なものでも、地域の習俗でもなく、私的なものとして捉えられるような) 法要・法座などの教化活動

こうした価値基準は、「宗教」に関わる出来事に対してのみ適用されているわけではありません。しかし、特定の価値基準に適った「宗教」の一面ばかりがニュースで取り上げられると、人によっては、ニュースに取り上げられない部分の「宗教」を「重要ではない」(あるいはそもそも「存在しない」と判断してしまう可能性があります。「報道する価値」の有無を判断する基準は、記事の内容を制約するだけでなく、人々の宗教観にも影響を与えているといえるかもしれません。

江田 昭道(教学伝道研究センター 研究員)



多くの人が「生きづらさ」を感じている時代  
その苦悩に寄り添うために

「自殺は悪いこと…」

しばしば、こんな言葉に出あうことがあります。これは自死に対する偏った見方、現実の自死への無知から生じているように感じます。

もちろん自死はあつてほしくないことです。しかし「自死は悪いこと」という言葉を聞いた遺族の方は、大切な人を責めているように感じられることでしょうか。なぜ自死は悪いといわれるのか、あらためて考えていきたい命題です。

◆ ◆ 「いのちを粗末にした…」

こうした言葉も自死を断罪しているように聞こえます。これも自死の現実からかけ離れた言葉です。

ここで人間の心のかたについて、思いを馳せてみましょう。私たちは「生きたい」という思いを基本的に持っています。ただ一方で、「死にたい」という感情も、強弱の差はあれ、誰もが一度は感じたことがあるのではないのでしょうか。また、これから先には強く思うことがあるかもしれません。

自死で亡くなっていかれた方や自死念慮者についても同様です。最初から「死にたい」などと考えるはずはありません。そし

て最後の最後まで「生きていたい」という思いを持ちながら、さまざまな要因に追いつめられて死を選ぶはかばかかったと推察されます。最後まで一生懸命に生きようとした人を「いのちを粗末にした」と責めることができるでしょうか。

◆ ◆ さて、言葉は本来、人に勇気や力を与えてくれるはたらきを持ちます。

ところが、自死を「他人事」として一般論的に語ってしまうと、その逆の作用もはたらきます。そうして発せられた言葉は当事者の思いを離れ、その言葉を耳にした人の心を傷付け、苦悩する人を孤独へと追いやってしまいます。とりわけ生死にかかわることとがらについては、「他人事」として語られる言葉は心に響きません。

◆ ◆ 無理解・偏見のために、自死遺族や自死念慮者は、その苦悩を語りたくても語れないという複雑な感情に苛まれます。

もちろん人は先入観や価値観を完全に捨て去ることはできません。その意味で私たちは、他者の苦悩、特に生死にかかわるそれを、本当に理解することはできないのかもしれませんが。

◆ ◆ しかし、苦悩する人との信頼関係は、自分の価値観を捨て、その人の思いに共感しようとしている姿によって紡がれていきます。共感しようとしてくれる人がそこにいるだけで、苦悩の氷が少しずつ解けていくことでしょうか。独りではとても歩んでいけないような険しい道に直面したときには、横に並んで歩いてくれる人、見まもってくれる人のいることが大きな力となるはずです。

◆ ◆ 次回は「寄り添う」「傾聴する」ということについて考えてみます。



## 『註釈版』にはどうして『末灯鈔』がないのですか？

### ◎はじめに

『末灯鈔』は、親鸞聖人のお手紙を集めたお聖教の一つで、その名前をご存知の方も多いのではないのでしょうか。その『末灯鈔』に関して、

『註釈版』にはどうして『末灯鈔』がないのですか？

と、よくご質問をいただきます。今回の「聖典こぼれ話」は、このことについてお話しします。

### ◎親鸞聖人のお手紙

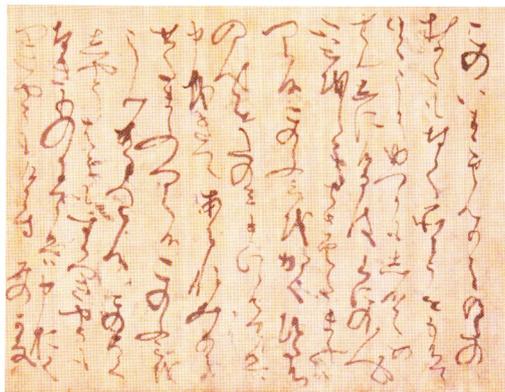
親鸞聖人には、関東から京都に戻られてからの約30年間に、門弟の質問に答えられたり、身の回りのことについて書かれたお手紙が残されています。そのお手紙は、現在43通が数えられ、親鸞聖人の御自筆や、門弟が書き写したものの、あるいは親鸞聖人の没後に蒐集されて御消息集という冊子の形で伝えられたものが残っています。先の『末

灯鈔』は、寛如上人の二男である従覚上人が編集されたものです。

### ◎さまざまな御消息集

その御消息集には、『末灯鈔』をはじめ、『親鸞聖人御消息集』や『御消息集善性本』などがあります。こうした御消息集は、複数のお手紙を一つにまとめたものですので、様々な御消息集に同じお手紙が収められていたり、一部の御消息集にしか収められていないお手紙があったりしています。また、その順番も年代順ではありません。

ですから、「親鸞聖人のお手紙のすべてを年代順に読みたい」と思っても、それぞれの御消息集に何が収められているかを理解していなければ、見落としかねません。



親鸞聖人御真筆「ひたちの人々の御中へ」(本願寺蔵)  
『註釈版聖典』799頁所収

### ◎『註釈版』の「親鸞聖人御消息」

そこで『註釈版』では、これらの御消息集を、お手紙ごとにバラバラにして、親鸞聖人のお手紙のすべてを通読できるように整理し、編集しました。それが『註釈版』所収の「親鸞聖人御消息」なのです。

ですので、『註釈版』の脚註に示しましたように、『末灯鈔』に収録されているお手紙はすべて「親鸞聖人御消息」に収録されているのです。

### ◎『註釈版』の編集方針

では、その編集の方針について簡単にご紹介しましょう。

先にも述べましたように、親鸞聖人のお手紙には、御自筆のもの、門弟が書き写したものの、また御消息集にしかないものがありますが、『註釈版』ではそれらを、

- ① 日付と内容によって年代の確定ができるお手紙
- ② 日付が月日しかなく、年代の確定に疑問が残るお手紙
- ③ 日付のないお手紙

の順で整理して、重複するお手紙はひとつにまとめています。

例えば、このうち①について見てみましょう。年代確定については多くの学者によって研究がなされており、『註釈版』でもその研究成果から、配置の順序を決めています。

『註釈版』の737頁を開いていただきますと、第二通目に「かたがたよりの：」で始まるお手紙が収められています。これは、『御伝鈔』下巻の第三段に出てくる明法房の往生が記されたものです。このお手紙は、最後(742頁)の日付に、「建長四年二月二十四日」とありますので、親鸞聖人が80歳の時に書かれたことがわかります。

次に第三通目を見ていただきますと今度は日付がありません。これではいつ書かれたものがわかりません。しかし、その内容は「明法御房の御往生のこと」とあって、先の明法房の往生について記されています。このことからこのお手紙は第二通目と同じ時期に書かれたものと考えて「①年代の確定ができるお手紙」に分類できるわけです。

### ◎最後に

このように『註釈版』では、親鸞聖人のお手紙のすべてを、年代順に読んでいただけるようにいたしました。このため、一見『末灯鈔』が収録されていないようにみえますが、実はこうしたかたちで収められているのです。

教学伝道研究センターでは、『親鸞聖人御消息 恵信尼消息(現代語版)』も刊行しております。あわせてご拝読下さい。



Buddhism & Nursing

## 仏教と看護〈1〉

### 看病の規則が定められたわけ

私たちは仏教の教えを実際の生活にどのように活かしていったら良いのでしょうか。そのことを考えていく上で大いに参考となるのが「律蔵」です。律蔵には、釈尊が定めた生活規則とその規則が定められた由来が記されています。そのため、そこに当時の仏教者の生き生きとした生活を垣間見ることができるのです。このシリーズでは、そうした仏教者の生活の場から、仏教における看病の問題について因縁譚を紹介しながら考えていきます。

このような話です。ある日、釈尊が阿難を連れて僧坊を巡回していたところ、一人の病気の比丘(男性の出家修行者)が糞尿の中に横たわっているを見つけました。釈尊と阿難はその比丘から「誰も彼を看病する者がいない」と聞き、比丘の体を水で洗いきれいにしました。その後、釈尊は他の比丘たちを集めて、「なぜ看病しないのか」と尋ねました。すると比丘たちは「かの比丘は他の比丘たちに何もしませんでした」などと答えました。それに対して、「出家者たちには父母兄弟がいないのだから、相互に看護しなければなりません」と釈尊は答えました。これによって、サンガでは、重い病気になった修行者を、修行仲間がきちんと看病するという決まりができました。

なお、この箇所は単なる看病ではなく、基本的には終末期の看病を問題にしていると思われます。というのも、ここで話題になっているのが寝たきりの重病人だからです。また、この因縁譚に前後して死者の衣を分配する規則の話が収められていることも、ここでの病人が重病人であることを示唆しています。

「律蔵」の中には、今回ご紹介したもの以外にも、病人の看護に関するエピソードが見られます。次回以降では、そんなエピソードや看病のきまりについて、詳しく紹介していきたいと思います。

## 教学相談メモ

### 便利！『季刊せいてん』

御影堂はなぜ「ごえいどう」と呼ばれるのか？

教学相談に寄せられる質問は、いくつかの分野に大別することができます。

「み教え」「仏事」「物事の由来」。この中で回答するのが難しいのはどの分野の質問だと思われますか。

「み教え」…最も大切なことですから、もちろん簡単に答えられるわけではありません。しかし、常に伝えるべきはご本願ですし、様々な先生方が丁寧に書かれた参考資料も豊富にあります。回答の道筋に悩むことはあっても、サジを投げることはありません。

「仏事」…圧倒的に多い質問です。作法の正誤だけではなく、その土台となっているみ教えにこそ心を向けていただけるような回答を目指しています。こちらもやはり、回答方法に悩むことはあっても、結論自体は明確です。

「物事の由来」…実はこれがある意味で一番難しいのです。例えばこんな質問。

「〈御影堂〉を、他宗派では〈みえいどう〉と読むことが多いと思うのですが、どうして西本願寺では〈ごえいどう〉と読むのですか？」

こうした素朴な事柄は、理由がいちいち説明されていないことが多く、既知の資料に記述がなければ答えることは非常に難しくなってきます。もちろん、根拠のない憶測をお伝えすることはできません。せめて専門の先生の見解なりともお聞きできれば…。

それができるのです。『季刊せいてん』No.87に掲載された座談会「御影堂にこめられた匠の技」での、白石悦二氏(京都府教育庁指導部文化財保護課専門幹)と岡村喜史氏(龍谷大学准教授)とのやりとりを見ましょう。

**白石** 本願寺の歴史を一通り見て読み取れる内容ですが、岡村先生もご存知でしょうが、当初は「影堂(えいどう)」と呼ばれていたはずだと思います。ただ、「影堂」という名称に敬語的に「御」をつける。その現れが、覚信尼さんの譲状に「御糸いたう」(弘安三年〈一二八〇〉十月二十六日 専証房宛)と出るものが一番最初の文言で、漢字と平仮名が書いてあるから、はっきりとはわかりませんが、おそらく「ごえいどう」でなくして、「おんえいどう」であろうと考えています。

その他にも代々の譲状がありますね。あれには初めの時期には「影堂」としか書いていなくて、途中から「御影堂」と「御」をつけて書くようになっていきますね。ふりがなが振っていないので、読み方は正確にはわからないのですが、その三文字が使われています。それがいつ頃かという、見た限りでは、十四世紀の中ごろから十五世紀のはじめぐらいまでは、「御」があってもおそらく敬語的な意味合いであって、単語としては「影堂」という名称であったと受け取っています。

**岡村** 一般的には「御影(みえい)」というお姿があって、それを安置するお堂という意味で御影堂というのですが、本願寺の場合は、「影堂」というお堂が出来上がってそれに対する敬称がついているというので、区切るところが違うと思うんですね。

歴史的にも本願寺は「御影堂」という言い方を早くからしていたと思うんですね。(42~43頁)

「聖典セミナー」で真宗聖典を学びつつ、他の解説書では言及されにくい、こうした浄土真宗の細かい事項を知ることのできるのが『季刊せいてん』のユニークなところ(1)。いつどんな記事が役に立つかわかりません。定期購読はしているけれど、本棚の肥やし、あるいは積ん読になっているという方は、ぜひこの機会にご一読を！(2)

人から質問を受けて、色々調べてみたけどどの資料にも情報が出ていない…と思ったら、こんなところに！『季刊せいてん』は、そんなささやかな楽しみを与えてくれるかもしれません。

(「いのちと念仏」相談センター)

(1) 他にも「あすありと…」の歌の初出(No.71・9頁、No.72・14頁)、国宝・唐門の彫刻の配置の意味(No.87・34頁、No.88・35頁)、浄土真宗で「般若心経」を用いない理由(No.88・60頁)などなど、色々な情報があります。

(2) 購読のお申し込み・お問い合わせは、[フリーダイヤル]0120-464-583 本願寺出版社まで。年4回発行・1部700円(税・送料込み)



御影堂の呼称について

岡村 それではまず少し御影堂について白石先生におうかがいいたします。本願寺の御影堂の呼び方ですが、白石 公文書的なものは「天佛堂」とされていますが、歴史的には「本山さんは「御影堂」と呼ばれていますので、「本山さん」に対しては、私どももそう呼ばせていただいております。

2009年度 教学シンポジウム

## 「真宗の土徳 ～地域に薫る念仏～」を終えて

### 「土徳」

念仏者を多く育てた真宗の盛んな地域。  
特に真宗特有の文化を持つ地域。  
その土地にそなわった徳のこと。

12月15日(火)、教学シンポジウムが、「真宗の土徳 ～地域に薫る念仏～」をテーマに開催されました。

真宗地帯と呼ばれる地域には、地域ごとにさまざまな特徴があります。このシンポジウムでは、お念仏を後世まで伝えていきたいという思いが各地に共有していることを教えていただきました。

本願寺の門前町に目を向けてみると、「朝の喚鐘に合わせて店を開け、本山が閉門すると店を閉める」といった日常風景が今もあります。また、本願寺の御正忌報恩講や降誕会などは、開明社の方々のご協力によって成り立っていることをご存じでしょうか。開明社とは、長い歴史に渡り本願寺を護持してきた、本願寺御用達商の方々です。御正忌報恩講では、紋付き袴・羽織を着た開明社の方々によるお手伝いの姿を見ることができます。このように開明社は、今も本願寺を支える大切な組織なのです。

同様に、各地域にも多くの「講」組織があり、長い歴史を通して本願寺を支えていただきました。2009年4月に修復が完了した御影堂は、この「講」組織をはじめ、多くの方々のご支援によるものであったことが、シンポジウムでは報告されました。このように本願寺は、全国の門信徒や、門前町や開明社など近隣に住む人たちの思いによって支えられているのです。

各地にも寺院を中心として、さまざまな「土徳」が育まれています。普段、何気なく行っている習慣の中に、お念仏を伝えようとする先人たちの思いが受け継がれています。皆さまの身近でも、知らず知らずのうちに馥郁(ふくいく)たる「土徳」が育まれているかもしれません。

那須 公昭(教学伝道研究センター 研究助手)



宗祖650回大遠忌 活気ある門前町



御正忌報恩講「お斎」の接待

ブックレット発刊のご案内

『教学シンポジウム 真宗の土徳 ～地域に薫る念仏～』(2010年刊行予定)

#### 第Ⅰ部「門前町の真宗文化」

- ① 門前町に関する提言—まちづくりと人づくり/井口 富夫(龍谷大学教授)
- ② 開明社の紹介/宇佐美 直秀(開明社理事長)

#### 第Ⅱ部「御影堂をささえるもの」

御影堂をささえるもの/菅原 健一(NHKエンタープライズ)

#### 第Ⅲ部「各地域の真宗文化」

- ① 真宗門徒の民俗文化伝承/蒲池 勢至(同朋大学講師)
- ② 江戸時代の寺院由緒書からみる広島の実宗信仰/引野 亨輔(福山大学准教授)

パネルディスカッション/コーディネーター:清基 秀紀(京都女子大学講師)

東京支所発行のメルマガで「声」という文字を検索すると、「人びとの声」という意味で用いられていることが多いのに驚かされる／誰の声か特定されない「匿名」が特徴だ／「〜という声が聞かれた」「〜という批判の声があった」といったように／

特定されない声は、しばしば「心ない声」となり人びとを苦しめる／研究所では自死問題に取り組んでいるが、「自死はわがまま」「自死は命を粗末にしている」という「声」が聞こえてくる／こうした「声」によって、遺族は「肩身の狭い思いで暮らして」いる／

釈尊は、自死念慮の弟子に「命を大切に」とは告げず仏法を説いた／生と死の境界線上に立っている人間にとって、「命を大切に」という言葉にどんな意味があるだろう／自死念慮の弟子に、他の弟子たちは「生きて」と声を挙げて世話をした／弟子が自死した時も、釈尊は、その死を責めることなく、生前について静かに語った／

遺族ケアに取り組み平山正実氏の「自死者の名誉回復文」（一部）を紹介しよう／「わたくしたちは、自死者はいのちを大切にできなかったわけではなく、それぞれのかかえる問題でやむにやまれず、みずからの命を絶たざるをえない状況に追い込まれたのだと考えます」／「わたくしたちは、自死者は繊細、純粹、心やさしく、死ぬまで精一杯努力し、まじめに生きてきた人たちであると考えます」／

弥陀のよび声をいただくものとして、念慮者や遺族の声に耳を傾け、偏見のない声を届けていきたいと思う／

藤丸 智雄（教学伝道研究センター 常任研究員）

◇コラムの内容は、七月六日付毎日新聞記事「自死者の名誉回復を」に基づいています。平山正実氏（聖学院大学教授）は十一月開催の「本願寺別離の悲しみを考える会」で講演いただきました。その内容は、ブックレットとして発刊されます。

### 自死とわたしたち

～さまざまな課題にむきあつて～

編集：教学伝道研究センター

本願寺出版社刊 800円

本願寺で開催したフォーラムの記録集。奈良女子大学の清水新二氏による基調講演「身近な自死と社会的対応—仏僧、仏教界への期待—」をはじめ、パネルディスカッションなどを収録。自死遺族の支援を通して僧侶や寺院の役割を探る。自死対策に関する入門書として最適。



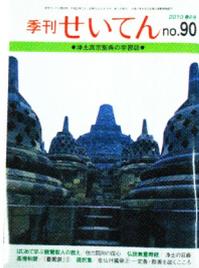
### 浄土真宗聖典の学習誌

#### 季刊せいてん

編集：教学伝道研究センター

本願寺出版社刊 700円

聖典拜読の手引に、グループ学習のテキストに適した、浄土真宗の教えを読んで味わう学習誌。



## 研究所刊行物ご案内

## 所長あいさつ

「あなかしこ」第2号をお届けできるはこびとなりました。創刊号をお読み下さった多くの方々から好意的な評価をお寄せいただきましたこと、誌面を借りて、厚く御礼申し上げます。

あるご住職さまから「もっと部数を増やして販売してくれたら、何冊か買ってご門徒にも配りたい」とのお言葉をいただきました。現在は、寺院数分の部数ですが、よりいっそうの内容の充実はもとより、部数の拡大にも視野を広げることができればと願っています。

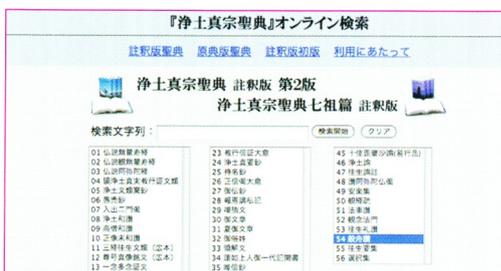
現在、研究所が課題として取り組んでいる諸問題は、宗門が直面している最先端の課題であります。研究所では、親鸞聖人のみ教えを基本視座として、これらの課題を解決すべく歩みを進めております。

この「あなかしこ」が、教学の振興に資すると共に、現代の諸問題についての理解と視座を共有する媒体となりうれば幸いです。

今後とも、ご指導とご支援を切にお願い申し上げます。

満井 秀城（本願寺教学伝道研究所 所長）

## 研究所のホームページ紹介



インターネットでお聖教の検索ができるということはご存知でしょうか？「あの言葉はお聖教のどこに出ているかな？」とか「親鸞聖人はこの言葉をどのように用いられているだろうか？」ということを知りたい時、検索したいお聖教を選び（複数選択可）、調べたい語句を入力して、検索ボタンをクリックすれば、瞬時に検索結果が表示されるという優れたもの、それがこのオンライン検索なのです。

この検索システムでは、本願寺出版社より発行されている『浄土真宗聖典』（註釈版〔初版・第二版〕・註釈版七祖篇・原典版・原典版七祖篇）に記載されているすべてのお聖教について検索することができます。

また、『浄土真宗聖典』に記載されているお聖教本文のフルテキストデータも、『浄土真宗聖典』聖教データベースのページよりダウンロードすることもできます。

みなさんの聖典の学習、教学の研鑽、学術研究に是非ご活用ください。

『浄土真宗聖典』オンライン検索

検索

<http://crs.hongwanji.or.jp/kyogaku/online.htm>